ISSN 1349-385X

名古屋大学 大学文書資料室ニュース

NUA Nagoya University Archives

Nagoya University Archives News　第28号　2011. 3

目次 Contents

歴史文書を見る「いま」と「将来」の目（大学文書資料室長 池内　敏）―― 2
文系部局法人文書の評価選別作業 ―― 3
名高商・名大経済学部90周年記念展の開催 ―― 4
ホームカミングデイで２つの展示 ―― 6
紀要とブックレット増補版の刊行 ―― 7
資料室日誌（抄）―― 8
大学文書資料室が「国立公文書館等」になります ―― 10

左＝第１回名高商卒業生が大正13年に母校へ寄贈した「創統の鐘」（キタン会所蔵）
右＝校章（マーキュリーと草薙の剣）をあしらった名高商校旗（大学文書資料室所蔵）

http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/

歴史文書を見る「いま」と「将来」の目

大学文書資料室長　池内　敏

最近、池鯉鮒宿（愛知県知立市）で本陣職を勤めた永田清兵衛家に伝わる古文書「宿帳」の翻刻紹介をしました。池鯉鮒宿は江戸時代に東海道の宿場であり、本陣職は大名・公家を対象とした休泊施設です。「宿帳」は、何年何月何日にどこの大名が家臣を何人伴って宿泊し、食事として何を提供し、宿代や褒美にいくらもらったかという、客観的な事実の淡々とした記載が延々と繰り返される、いわば無味乾燥な史料です。また、行間には走り書きや略語も少なくなく、後世のわれわれからすると直ちには了解できないようなことがらもしばしばあります。おそらく「宿帳」が作成された当時、作成者には略語等々の意味は容易に分かっていたのであり、また、延々と同じような記事を繰り返し記録することにも実際的な価値があったのだろうと思います。

この「宿帳」を翻刻紹介する過程で永田清兵衛家に伝わる家系図や由緒書にも目を通しました。それによると永田家は寛文10（1670）年ころから池鯉鮒宿本陣職に就き、のち代々世襲したと記されています。にもかかわらず、昭和40年代に編纂された『知立市史』等々によると永田家の本陣職就任時期をめぐっては諸説紛々としていて、はっきりしませんでした。このたび、永田家に伝来する様々な古文書を読んだ上で「宿帳」の淡泊な記載を眺め直してみると、永田家の本陣職就任時期は概ね寛文７年ないしは８年であろうことが確定できました。また、その後の世襲状況についても実は一筋縄ではなく、いささか複雑な経過をたどっていたことが、「宿帳」と他史料との突き合わせを介して明らかにすることができました。

＊

あるとき作成され文書に書かれたことがらが、その作成当時や作成に近い時期にあっては誰でも容易に了解できたことが、一定の期間を経て見直してみると理解不能になっていることがあります。また、作成された当時には（意図的であったかどうかは別にして）隠されていたことがらが、後世になって史料解読にかかわる様々な方法論が発展することによって明るみに曝されることもありえます。

私ども大学文書資料室は、国立大学法人名古屋大学において作成された様々な公文書について、作成された時点における法人の意思決定について何十年後かの将来においても検証可能となるように、重要な公文書をきちんと保管し継承すべく作業を行っています。それはいま作成している時点からすると、「こんなものを残す必要があるのか」と思うような文書かもしれません。それは、いまを生きているわれわれからすれば、あまりに当然で常識となった内容であるがゆえに、そのように感じるのかもしれません。文書を作成した世代がいなくなってから後の将来には、「なぜ、このときこんなことをしたのか」とする発問が出てこないとも限りません。あるいは、淡泊な記述の裏に隠されている史実を掘り起こす人も出てこないとも限りません。

古文書を含む歴史資料について、いちど目を通して内容を知ってしまえばそれでもう用済みだ、とする誤解をお持ちの方がいるようです。「いま」「われわれ」の能力ではそうかもしれません。けれども、「将来」「ほかの人びと」の目を通してみたら、まったく別の世界が開けてくることは火を見るより明らかです。

私どもの資料室が日々行っている作業は、一見すると、意味の少ない地道な作業の繰り返しのように感じられるかもしれませんが、如上の事情をご理解いただけると幸いです。

大学文書資料室長に就任して一年が経ちました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

文系部局法人文書の評価選別作業

大学文書資料室（以下、資料室）は平成16（2004）年度から、本学の事務組織で保存期間が満了した法人文書（非現用文書）の移管をうけ、それらを評価選別し、歴史的に重要な文書を永久に保存・公開するという業務を担ってきました。ただ、年度末に保存期間が満了する法人文書は、全学で毎年約4,000ファイルにも及び、資料室にはそれら全てを保管するだけのスペースがありませんでした。

やがて、豊田講堂の全面改修工事にともない、その地階倉庫に本部の非現用文書が大量に保管されていることが分かり、これらを処分する必要が生じました。これを理由に作業室と一次保管場所を確保し、平成17年11月から評価選別作業を開始しました。

ただ、選別された歴史的に重要な法人文書をしかるべき環境で保存する書庫が不足していること、さらに4,000ファイルもの法人文書をいったん資料室に移すことは難しいことから、現用文書を保管する書庫の満杯や移動などで、処分せざるをえない法人文書が生じた場合にのみ評価選別をおこなうのが精一杯でした。このため、本部および部局の書庫には、かなりの法人文書が滞留していくことになりました。

そこで資料室では、非現用文書の１次選別は本部や部局の事務組織に委任し、資料室は１次選別の結果をうけて、最終選別のみをおこなうという方法を検討するようになりました。具体的には、資料室が１次選別のための基準（マニュアル）を作成し、これを使って事務職員に作業をやってもらう構想です。

ところが、平成21年７月に公布された公文書管理法（公文書等の管理に関する法律）では、大学文書資料室の助言を得ながらではありますが、本学の職員が選別作業をおこなうことになりました。そして、いったん資料室に移管された文書は、原則として廃棄できなくなったのです。事務職員に示す選別基準は、大まかな１次選別ではなく、最終決定に近い選別をおこなえるものでなければなりません。

そこで平成22年度の評価選別作業は、各部局の書庫に滞留する法人文書を処分すると同時に、公文書管理法に対応する選別基準（マニュアル）を作成することを視野に入れて実施することになりました。

対象としたのは、文系事務部が担当する部局の法人文書です。その理由は、文系部局は事務を統合したので作業がやりやすいこと、部局の規模が小さいので多くの部局をサンプルにできること、学部を持たない独立大学院や新しい部局を含んでいることです。

最初に、各部局の書庫を調査した結果、「非現用」（移管されていないので厳密には現用）文書のほとんどは、文系総合館ではなく各部局棟の書庫に保存されるシステムになっていることが分かりました。そこで、部局棟書庫の文書を選別の対象とすることにしました。

ただ実際には、現用文書と「非現用」文書が分別されて書庫に排架されているわけではなく、その分別は資料室ではできません。また、現用文書のファイル名リストとして、「法人文書ファイル管理簿」（名大のHPで一般に公開）がありますが、これも書庫の排架順にはなっていないのが実状です。

経済学研究科棟書庫。この写真の書架の最上段には、昭和30年代を中心とする古い教授会記録が排架されていた。

そこで今回は、「非現用」文書だけではなく、現用文書も選別の対象とし、作業の対象とした文書のファイル名のデータも、資料室が独自に入力することにしました。現用文書もやがては非現用となるわけですし、そもそも公文書管理法では、現用文書の段階で評価選別をしておくことが定められているのです。

こうして本年度は（平成23年２月17日時点）、文学研究科、教育発達科学研究科、法学研究科、経済学研究科、国際開発研究科、国際言語文化研究科の文系６部局と、医学系研究科総務課人事掛、本部では総務部人事労務課の法人文書の評価選別作業を実施しました。選別した法人文書の総数は約12,500ファイル、そのうち移管を希望したのは約900ファイルです。

この移管ファイル数は、１次選別ではともかく、最終選別としては多すぎるので、事務職員や第三者の意見を取り入れつつ、さらにしぼりこめる選別基準を作成していきたいと考えています。

名高商・名大学経済学部90周年記念展の開催

企画展「響け！創統の鐘」の開催

このたび、平成21（2009）年11月３日から12月18日を会期に、第20回名古屋大学博物館企画展「響け！創統の鐘―名高商から名大経済学部への90年―」が開催されました。博物館・大学文書資料室・経済学部・キタン会の主催による事業です。

企画展「響け！創統の鐘」（以下、本企画展）は、本学経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校（名高商）が大正９（1920）年に設置されてから90周年を記念したものです。博物館の企画展であると同時に、社団法人キタン会（名高商と名大経済学部の同窓会）によるキタン（名高商・名大経済学部）創立90周年記念事業の一環でもあります。

同窓会との共催

これまで、大学文書資料室（以下、資料室）は、本学の歴史をテーマとする展示活動を毎年のようにおこなってきました。

とくに平成20年は八高展、平成21年は名大創立70周年記念展と、会期の長い比較的大規模な企画展を２年連続で開催してきましたが、いずれも名古屋大学博物館（以下、博物館）との共催でした。

資料室にとって、同窓会組織との共催による展示会は、今回が初めての経験となりました。

開催の経緯

平成20年11月、キタン会から資料室に記念展の開催が提案され、さっそく資料収集に入りたい意向が示されました。

資料室としても、この年に八高創立100周年を記念して八高展を開催していたこともあり、名高商創立90周年である平成22年に名高商展を開催することを視野に入れていました。ただ、展示にどのくらい力が割けるかという不安があり、キタン会のこの申し出は大変ありがたいものでした。

平成21年に入って、１月のキタン会理事会で記念展の開催が承認され、５月および９月には博物館・資料室・キタン会の担当者が会合し、平成22年秋に博物館企画展として開催すること、取り扱う年代を名高商創立から経済学部の東山移転（昭和34年）までとすることなど、企画展の大枠について合意をみました。

そして平成21年11月には、キタン会のキタン創立90周年記念事業実行委員会の下に、キタン90周年記念展委員会（以下、記念展委員会）が設置されました。

この記念展委員会は、キタン会から山村哲朗委員長以下12名、資料室から堀田慎一郎室員と田渕宗孝事務補佐員、博物館から教員２名、経済学部から教員２名（キタン会員）、そして本学文系事務部から教務課長、というメンバー構成です。ほぼ月１回のペースで開催され、本企画展の方向性を決める場となりました。

準備行程の概略

初期の準備作業の中心になったのは、キタン会による資料収集事業でした。

とくに記念展委員会の山村委員長は、『キタン新聞』や記念展専用のホームページなどで会員に資料の提供を広く呼びかけるなど、大変熱心に資料収集活動を展開されました。本企画展には、この収集活動によって新しく発見された資料も多く展示されています。今回収集された資料は、のちに大学文書資料室に寄贈されることになっており、これも本企画展の大きな成果の１つといえるでしょう。

こうして、すでに資料室やキタン会が所蔵していたものに、今回新しく収集されたものを加えた、膨大な資料が用意されました。この中から、堀田室員が展示品を選定しました。その際には、無理にストーリーをつくらず、展示品１点１点の魅力やインパクトを重視しました。

展示会場の様子①

展示パネルは、一部を除いて堀田室員が制作しました。このパネルによって本企画展のストーリー性を担保しますが、その一方で、学術的な調査を前提にしながらも、研究者でなくても十分に理解してもらえる内

容にすることを方針としました。

こうして選定・制作された展示品および展示パネルの案を、博物館・資料室・キタン会による少人数のワーキングループでさらに検討して、最終的に内容を決定しました。

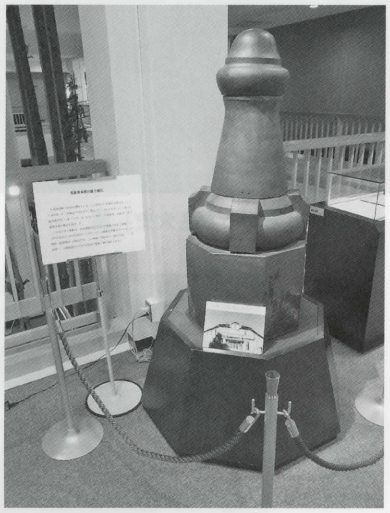
主な展示内容

ここでは、展示物の種類別に、それぞれの概略と特筆すべき展示のみを紹介します。展示の詳しい内容を知りたい方は、平成23年３月刊行の『名古屋大学大学文書資料室紀要』第19号掲載の展示記録をご覧ください。

展示会場の様子②

本企画展では、物品展示の数が多いことが特徴の１つになっています。

会場の博物館３階展示室（約153m^2）に設置した展示ケースは、60cm×120cmの長方形ケース12個、60cm×60cmの正方形ケース６個の計18個です。これは、同じ展示室で開催された前年の名大創立70周年記念展をはるかに上回っています。有力な展示品を多く集めることができたからこそです。

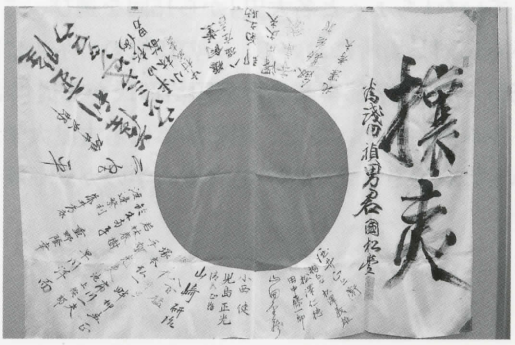


名高商本館の屋上棟瓦（大正10年）

また、バンディアン（展示用の衝立）に取り付けたり、ケースを使わず床や台に置いて展示する、大型展示物が多かったことも、本企画展の特色です。本企画展のテーマの由来となった「創統の鐘」、名高商校旗（以上２点は本ニュース表紙を参照）、名高商の屋上棟瓦、初代校長渡辺龍聖の自筆書掛軸、などです。これらによって、パネルやケースだけではこじんまりとしがちな展示会場にスケール感が出ました。

パネル展示は、全体を４つのコーナー（１．名高商から名大経済学部へ―歴史とキャンパス―、２．名高商の教育と研究―実践主義と総合大学の雰囲気―、３．名高商の学生生活―文武両道の「粋な高商さん」たち―、４．名大経済学部への継承と発展）に分け、各コーナー６枚ずつのパネル（68cm×108cmもしくは68cm×100cm）を制作しました。内容は、前述の方針にしたがって、写真や図表に即したものとし、文章による説明は極力少なくしました。

ハンズオンコーナー（資料コーナー）には、名高商・経済学部の著名人16名を、１名１枚のカード形式で紹介した「名高商 Who's Who?」などを展示しました。



入隊する学生への教員などの寄せ書き（昭和20年）

開催の結果

本企画展は、平成22年11月３日、岡田邦彦キタン会会長など多くの参列者を迎えた、キタン会主催のオープニングセレモニーによってスタートし、12月18日に幕を閉じました。

１ヵ月半の会期中の入場者は3,246名でした。とくに11月６日には、キタン創立90周年記念式典が豊田講堂を会場に盛大に挙行され、その約500名の出席者の多くが本企画展を観覧し、好評を得ました。

大学における自校史展示の意義の１つが、卒業生の母校への関心を高めることにあるとすれば、同窓会組織と密接に連携した本企画展は、その役割を大きく果たすことができたと思います。

資料室だより①

○ホームカミングデイで２つの展示をおこないました

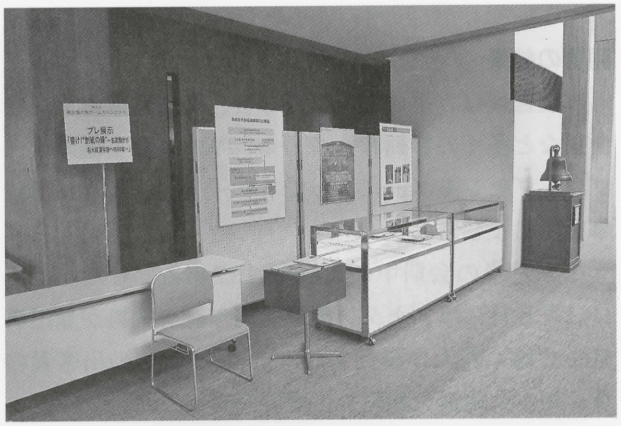
大学文書資料室は、平成22（2010）年10月16日（土）に開催された第６回名古屋大学ホームカミングデイにおいて、２つの展示をおこないました。

平成17年度から毎年度開催されている名古屋大学ホームカミングデイですが、大学文書資料室はそのいずれの回においても、必ず何らかの形で展示をおこなってきました。平成22年度は、名古屋高等商業学校（名高商）と名古屋大学経済学部に関する博物館企画展（本ニュース４～５頁に記事あり）を、ホームカミングデイ企画とする予定でしたが、諸事情により会期にホームカミングデイ当日を入れることができなくなりました。

そこでホームカミングデイでは、企画展の宣伝を兼ねて、そのプレ展示をおこなうことにしました。展示場所は、ホームカミングデイの主会場である豊田講堂のホワイエです。キタン会のご好意により、企画展のテーマの由来にもなっている「創統の鐘」を観覧者が自由に触ることができるようにしたほか、半月後の企画展で実際に展示した物品数点をガラスケース２つに入れて展示し、企画展のビラを自由配布しました。

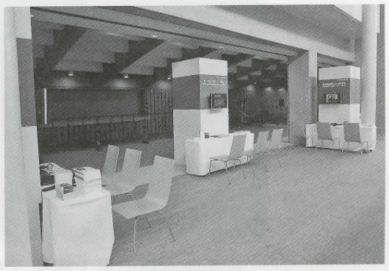
また、同じ豊田講堂のホワイエにおいて、もう１つの展示企画、「ちょっと名大史」展をおこないました。これは、大学文書資料室が名古屋大学の月刊広報誌『名大トピックス』の裏表紙に毎回連載し、平成22年８月号で100回を数えていた「ちょっと名大史」から15回を選び、これらを15枚の大パネル（81cm×108cm）にして展示したものです。

さらに同じ場所において、この15枚のパネルに関連の深い３つの動画を上映しました。その中の１つは、昭和38（1963）年経済学部卒業生の原田治彦氏から提供され、この日初公開となった第１回名大祭（昭和35年）の８ミリフィルム動画です。また、昭和39年に名古屋大学二葉会（工学部電気系同窓会）が製作した「名大電気学科25年の歩み」に収録された当時の名古屋大学のカラー映像も、まだカラーテレビが普及していない時代の大変貴重なものです。



プレ展示「響け！創統の鐘」

「ちょっと名大史」展



「ちょっと名大史展」の動画ブース

資料室だより②

○紀要とブックレット豊田講堂編の増補版を刊行しました

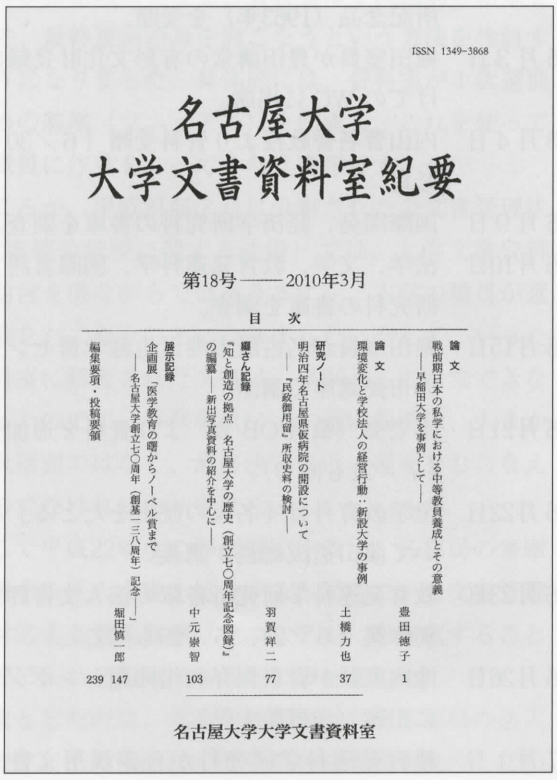
昨年３月、大学文書資料室では、『名古屋大学大学文書資料室紀要』第18号および名大史ブックレット第９巻『豊田講堂―Toyoda Auditorium―』の増補版を刊行しました。

紀要は、近代日本の高等教育史に関する論文、現代日本の高等教育史に関する論文、名古屋大学の歴史に関する研究ノート、平成21（2009）年に大学文書資料室が中心になって編集した名古屋大学創立70周年記念図録の編さん記録、同じく平成21年に大学文書資料室が主催（博物館と共催）した名古屋大学創立70周年記念展の展示記録と、大変多様かつ充実した内容となりました。頁数も240頁と、創刊以来最大です。

本紀要は、室外・学外にも広く門戸を開き、記録史料学（アーカイブズ学）および名古屋大学史を含む高等教育史に関する論文の投稿を募集しています（レフリー制度あり）。本号でも、２本の学外からの投稿論文を掲載しました。これからも、皆さまからのご投稿をお待ちしております。

名大史ブックレットは、平成16年に刊行された豊田講堂編を大幅に増補したものです。この巻は、名古屋大学のシンボルともいえる豊田講堂の歴史を手軽に知ることができる冊子として、大変好評をいただいていました。ところがその後、平成18年から19年にかけて大規模な改修・増築工事が実施され、豊田講堂の歴史に大きな画期となったため、これについて解説する章を増補したものです。

現在、名古屋大学は、国の登録有形文化財として豊田講堂の登録を申請中です。登録が認められれば、名古屋大学のみならず地域社会においても、あらためて豊田講堂の存在が注目されることになるでしょう。この増補版を活用する機会が、さらに多くのなるのではないかと思います。


ISSN 1349-3868

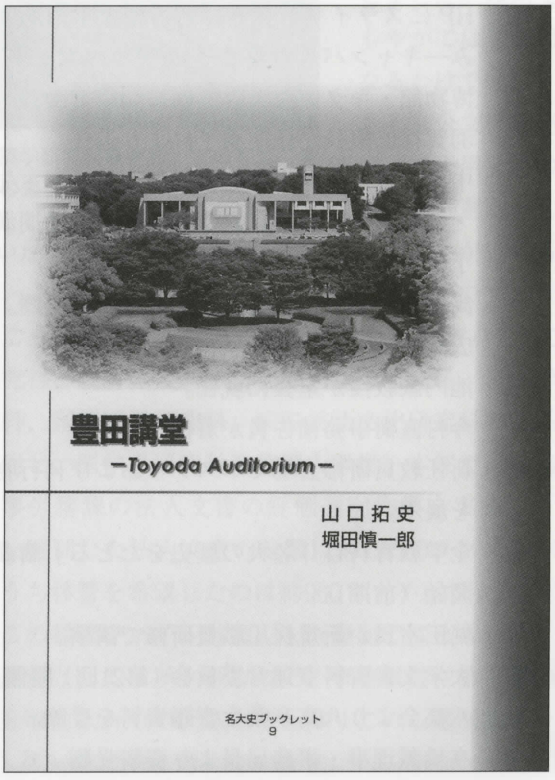
名古屋大学
大学文書資料室紀要

第18号――2010年3月

目　次

論文
戦前期日本の私学における中等教員養成とその意義
――早稲田大学を事例として――　豊田徳子　1
論文
環境変化と学校法人の経営行動：新設大学の事例　土橋力也　37
研究ノート
明治四年名古屋県仮病院の開設について
――『民政御用留』所収史料の検討――　羽賀祥二　77
卿さん記録
『知と創造の拠点　名古屋大学の歴史（創立七〇周年記念図録）』の編纂――新出写真資料の紹介を中心に――　中元崇智　103
展示記録
企画展「医学教育の雛からノーベル賞まで
――名古屋大学創立七〇周年（創基一二八周年）記念――」　堀田慎一郎　147
編集要項・投稿要領　239

名古屋大学大学文書資料室



資料室日誌（抄） 平成22（2010）年2月～23（2011）年1月

2月6日　堀田慎一郎室員が大学アーカイヴズに関する研究会に出席（京都大学大学文書館）。

2月15日　堀田室員がキタン90周年記念展委員会に出席（3／1、4／12、5／10、6／14、8／2、9／13、10／4も同じ）。

2月17日　大学文書資料室運営委員会（第20回）開催。

2月25日　キタン会と企画展について打ち合わせ（堀田室員、8／30、10／7も同じ）

3月3日　施設管理部長と書庫に関する打ち合わせ（羽賀室長、堀田室員、加藤主任）。

3月9日　神戸大学附属図書館より2名が視察。

3月15日　『名古屋大学大学文書資料室紀要』第18号、『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第27号、名大史ブックレット第9巻増補版、『濵口道成第13代総長特別講義　21世紀の名古屋大学』などを刊行。

3月16日　南山大学史料室の永井英治准教授が来室、外部評価実地調査・ヒアリングを実施。

3月17日　京都大学大学文書館の西山伸准教授が来室し、外部評価実地調査・ヒアリングを実施。

3月18日　黎明会（岡崎高等師範学校同窓会）加藤貞夫氏より資料を受贈。

3月19日　HPにスライドショー「名古屋大学のあゆみ―キャンパスの変遷―」をアップロード。

3月23日　博物館・キタン会と企画展について会談。

3月31日　羽賀祥二室長が任期満了により退任。
中元崇智・今村直樹非常勤研究員、李主先・井筒康人・淺野麻衣事務補佐員が任期満了により退職。
高橋昭名誉教授、桑原清氏より資料受贈。
広報室より資料移管。

4月1日　池内敏教授が室長に就任。
今村直樹事務補佐員が着任。

4月6日　新任教員研修会場でポスターおよび刊行物を展示。

4月13日　全学教育科目「名大の歴史をたどる」講義開始（前期）。
堀田室員が新規採用職員研修で講演。

4月14日　大学文書資料室運営委員会（第21回）開催。
八高会より八高卒業生寄贈資料を受贈。

4月15日　高橋誠理事・事務局長より資料受贈（6／22、11／4も同じ）。
ホームカミングデイ実行委員会に出席（田渕宗孝事務補佐員、5／28、7／2、9／15も同じ）。

4月20日　情報科学研究科外山勝彦准教授より資料を受贈。

4月22日　総務部総務課法規掛と情報開示請求への対応について打ち合わせ。

4月24～25日　堀田室員が日本アーカイブズ学会に出席。

4月29日　名古屋大学ヨット部OB会「みなはや会」より関係資料を受贈。

5月15日　堀田室員が記録管理学会研究大会に出席（大阪大学）。

5月18日　大学文書資料室運営委員会将来構想専門委員会（第4回）開催。
文系事務部長と法人文書の評価選別について打ち合わせ。

5月20日　広報室より資料移管。

5月25日　池内室長が杉山理事と大学文書資料室の将来構想について協議。

5月26日　卒業生の高木遼氏より、プラズマ研究所開所記念品（1963年）を受贈。

6月3日　堀田室員が豊田講堂の有形文化財登録に向けてのWGに出席。

6月4日　内山晉名誉教授より資料受贈（6／30も同じ）。

6月9日　国際開発、経済学研究科の書庫を調査。

6月10日　法学、文学、教育発達科学、国際言語文化研究科の書庫を調査。

6月15日　堀田室員が名古屋市港区生涯学習センターの市民講座で講演。

6月21日　不老会（職員OB会）より資料を追加受託（7／21も同じ）。

6月22日　全学教育科目「名大の歴史をたどる」において濵口道成総長が講義。

6月23日　教育発達科学研究科書庫の法人文書評価選別作業（6／24、6／29も同じ）。

6月26日　池内室長が資料保存利用問題シンポジウムに出席（学習院大学）。

7月1日　教育発達科学研究科から非現用文書を移

管。
7月12日　理学・多元事務部より資料移管。
7月13日　堀田室員が全国大学史資料協議会東日本部会研究会に出席（国立公文書館）。
7月21日　平成21年度に作成した校費印刷物の提供を各部局に依頼。
7月22日　医学系研究科総務課（人事労務）法人文書の評価選別作業。
7月23日　医学系研究科総務課より非現用文書移管。
7月27日　大学文書資料室運営委員会紀要編集専門委員会（第10回）持ち回り審議終了。
8月5日　経済学研究科法人文書の評価選別作業。
堀田室員と田渕事務補佐員が学内情報翻訳データベース（NUTRIAD）説明会に出席。
8月25日　名古屋大学生協より資料受贈。
9月2日　経済学部より非現用文書移管。
国際言語文化研究科法人文書の評価選別作業。
9月8日　堀田室員と田渕室員が、小出悦子氏宅を訪問し、資料を借用。
9月9日　ホームカミングデイの企画展について打ち合わせ（堀田室員・加藤主任）。
9月16日　新アーカイブズ組織案に関する協議（杉山寛行理事、附属図書館長、文学研究科長、池内室長、総合企画室など）。
9月17日　博物館および荒川印刷と企画展について打ち合せ（堀田室員、10／12も同じ）。
9月22日　池内室長が杉山理事と新アーカイブズ組織案について協議。
10月1日　秘書室より、総長室書庫保管資料を移管。
10月13日　後藤朱美事務補佐員が退職。
10月16日　ホームカミングデイにて「ちょっと名大史」展と企画展プレ展示を実施。
10月19日　堀田室員と加藤主任が公文書管理法の説明会に出席（内閣府）。
11月1日　一橋大学附属図書館から1名が視察。
11月2日　理学部図書館より資料移管。
11月3～12月18日　博物館企画展「響け！創統の鐘」を開催。
11月4日　杉山理事、高橋理事、総務部総務課と「国立公文書館等」の指定申請について協議（池内室長・堀田室員）。
11月5日　附属図書館、総合企画室、総務部総務課と新アーカイブズ組織案について協議（池内室長、堀田室員）。
11月8～13日　本学でアーカイブズ・カレッジ（短期コース）が開催される（堀田室員が講義の一部を担当）。
11月12日　文系総務課より附属学校の資料を移管。
11月15日　堀田室員が博物館にて企画展のギャラリートーク。
11月18日　名古屋大学公文書管理プロジェクトについての打ち合わせ(11／29、12／16、1／27、1／31も同)。
野田市郷土博物館学芸員1名が視察。
12月1日　青木久仁子事務補佐員が着任。
国際開発研究科法人文書の評価選別作業。
12月2日　文学研究科書庫にて法人文書評価選別作業。
12月8日　国際開発研究科法人文書の評価選別作業。
12月9日　文学研究科法人文書の評価選別作業。
総務部長が資料室を視察。
中京大学より事務局次長、文学部長ら4名が視察。
12月12日　堀田室員が公文書管理法への対応について他大学と協議（京都大学）。
12月16日　名古屋大学文書管理プロジェクト会議（12月28日、1／20も同じ）。
法学研究科法人文書の評価選別作業。
12月22日　大学文書資料室運営委員会（第22回）開催。
12月24日　公文書管理法への対応について杉山理事、高橋事務局長、総務部総務課と面談（池内室長・堀田室員）。
1月7日　人事労務課と法人文書の評価選別作業について打ち合わせ（堀田室員）。
1月19日　内閣府公文書管理委員会に出席（亀原総務部総務課長・加藤主任・堀田室員）。
1月20日　防衛大学校から副校長ら教員3名が視察。
1月27日　附属図書館と「歴史資料等保有施設」指定について協議（堀田室員・加藤主任）。

○大学文書資料室が「国立公文書館等」になります

大学文書資料室は、平成23（2011）年４月１日に施行される公文書管理法における「国立公文書館等」に相当する施設として、内閣総理大臣からの指定を受けることになりました。

公文書管理法（公文書等の管理に関する法律）は、国や独立行政法人等の公文書等を、健全な民主主義の根幹を支える国民共有の知的資源と定義し、その適正な管理と歴史資料としての適切な保存及び利用等を図ることを定めた法律です。これによって、国や独立行政法人等の活動を、現在と将来の国民に説明する責務を果たすことを目的としています。これまで日本は、公文書の管理運用方法を統一的に定めた法律を持っておらず、この分野では諸国に大きく遅れをとっていました。その意味で、この法律は画期的な意義を持っています。

公文書管理法では、歴史的に重要な公文書等を「歴史公文書等」と呼び、さらにそれらが保存期間を満了すると、専門的な施設に「特定歴史公文書等」として永久的に保存しなければならないことを定めています。この専門的な施設としては、独立行政法人国立公文書館が設置する公文書館がありますが、そのほかにも、国や独立行政法人等の施設で、内閣総理大臣から指定をうけたものも認められています。これらの専門的な施設を総称して、「国立公文書館等」といいます。

このたび大学文書資料室は、この「国立公文書館等」として内閣総理大臣から認められたわけです。つまり、名古屋大学の法人文書のうち「歴史公文書等」にあたるものを、「特定歴史公文書等」として永久保存する施設です。もっとも大学文書資料室は、これまでも名古屋大学の歴史的に重要な法人文書の移管を受け、これを永久に保存する業務をおこなってきました。ただ、これが単なる大学のサービスではなく、国民の権利に応える義務になったことが大きく違います。また、「特定歴史公文書等」を管理するにあたって求められる条件も、これまでより厳しくなります。

より詳しくは、次号で紹介しようと思います。

名古屋大学大学文書資料室（名古屋大学本部別館）

大学文書資料室の書庫で保存されている名古屋大学の法人文書等

名古屋大学大学文書資料室ニュース 第28号
Nagoya University Archives News No. 28

名古屋大学大学文書資料室
室　長　池内　敏（教授・併任）
室　員　堀田　慎一郎（助教・専任）
主　任　奥谷　明稔
　　加藤　史征
事務員　増田　よしみ
　　田渕　宗孝

発行日　2011年3月31日
編集
発行　名古屋大学大学文書資料室
名古屋市千種区不老町〒464-8601
電話：（052）789-2046
FAX：（052）788-6222
E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印刷　株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38